

資格取得を学習の動機づけとした情報リテラシー教育 のパッケージ化

樋口勝一

(神戸海星女子学院大学 現代人間学部)

1. はじめに

18歳人口の減少により、私立大学の経営環境は年々厳しくなっている。入学者数減少が進む中、「経費削減」と「学納金以外の収入確保」は今後の経営にとって重要な課題である。今回提案する「資格取得を学習の動機づけとした情報リテラシー教育のパッケージ化」は学生満足度を向上させつつもこれら2つの課題を解決するための1つの有効な手段である。

2. 授業のパッケージ化の理由

授業のパッケージ化の理由には、「リテラシー・リメディアル教育」と「資格取得」という2つのキーワードがある。

大学における授業は「アカデミック性」や「教員の独自性」が求められるという旧来のイメージがある一方で、大学全入時代を迎え、必ずしもアカデミズムを期待して入学する学生ばかりとは限らない[1]、そして、彼らの基礎学力低下が問題となっている現在[2]、リメディアル・リテラシー教育が必要とされている。それらの科目では旧来の大学の授業よりも、むしろ「小～高の復習という決められたことを短時間で効率よく学べること」や「全学一斉に高品質で均質におこなえること」が求められる。そういう意味でリテラシー・リメディアル教育に関する授業と、「専任教員が統一したカリキュラム、小テスト、期末テスト、オリジナルテキストを作成」し、「非常勤教員がすべて担当」するという授業のパッケージ化は大変相性が良いと考えた。

また、「基礎的な資格取得を学習の動機づけに利用」することは、「授業計画がたてやすい」ことや、「担当者個々のパーソナリティに頼ることなく学習の動機づけがおこなえること」、「得点や合格率により、学生や教員を客観的に評価する基準ができること」などこれについてもパッケージ化との相性が良いと判断できる。

そして、パッケージ化のメリットとして、大学側からは「専任教員ではなく非常勤教員に授業を担当してもらうことで人件費が削減できること」や「資格試験の学内実施による手数料収入を得ること」があり、学生側からは「同一名称の授業では、担当者によらず内容・評価が一定であるため公平であること」や「資格をめざすことでやる気が出ること」がある。一方、デメリットは学生側にはなく、教員側には「専任教員がパッケージを作成する労力が必要となること」がある。しかしながら、一度パッケージを作成すれば、次年度以降の準備に対する労力は少なくなり、また、作成したオリジナルテキストは専任教員の業績になるので、むしろ、デメリットとは考えにくい。

3. 情報リテラシー教育のパッケージ化

著者は、勤務校において、9年間、情報リテラシー関連の授業を非常勤教員とともに担当してきた。これまで試験的にパッケージ化をおこなったが、結果は、資格を動機づけにすることで学生の学習成果と学習意欲が高まったことがアンケートで実証された[3]。また、オリジナルテキストを使用することで資格取得率も上昇した。

そこで、次年度より、情報リテラシーの授業を資格パッケージ化し、すべてを非常勤教員に担当してもらうことにした。具体的には、

- ・情報リテラシー1（1年次前期）、情報リテラシー2（1年次後期）、オフィス情報処理1（2年次前期）の授業を統一した内容、進度、テキスト、試験、評価方法でおこなう
 - ・授業マニュアルとオリジナルテキスト一式は、著者と非常勤講師で作成した
- また、目標資格については、下表のように対応させる。

表1. 授業と資格の対応（取得率は平成19年度のもの）

時期	授業科目	資格	取得率
1年前	情報リ1	日本語ワープロ技能標準試験 3級	3級 80%
		2級	2級 78%
1年後	情報リ2	表計算技能標準試験 3級	3級 66%
		2級	2級 65%
2年前	オフィス1	日商PC検定3級文書作成	15%

4. パッケージ化による経済的メリット

検定料収入は、1資格につき、平均して1,000円程度である。試験監督日当（1人1日当たり8,000円程度）を差し引くと、利益は、

1000円×のべ300名－8000円×6日×2名≒20万円となる。

次に、授業担当を専任教員から非常勤教員に切り替えることで、

専任給与1130万円（56歳平均[4]）－非常勤給与1科目15万円×8コマ～約1000万円の経費削減になる。もちろん、専任教員は授業以外に他の業務もおこなうため単純には比較できないが、それでもこれだけの差は無視できないだろう。

5. おわりに

今回のパッケージ化プロジェクトは非常勤教員にも好評で、「授業に集中できる」、「基準が決められているので不安感がない」という意見をもらっている。

また、文献[5]のフェニックス大学の例を参考にしたことを付記しておく。

参考文献

- [1]浦畑育生(2007)、さらなる挑戦、大学への挑戦第4号、全国大学実務教育協会、pp.10-13
福井有(2006)、大学とガバナビリティー、学法新書
- [2]西村和雄他編(1999)、分数ができない大学生、東洋経済新報社
- [3]樋口勝一(2009)、情報リテラシー教育における資格による学習動機付け効果、第28回全国大会プログラム・要旨集、日本ビジネス実務学会、pp.59-60
- [4]労働政策研究・研修機構ホームページ、キャリアマトリックス、<http://cmx.vrsys.net/TOP/>
- [5]吉田文(2002)、実験から実用へ移行するアメリカのeラーニングとその課題、Between、進研アド